遊びが展開される「場」の意味をとらえる保育実践
－砂場以外の場所で展開される砂遊びに着目して

北海道地区：丸谷雄輔・平野麻実・竹内倫子（札幌ゆたか幼稚園）
高橋真由美（藤女子大学）

＜企画主旨＞

本発表では、「砂場以外の場所」で行われている砂遊びに着目し、子どもがその「場」を選ぶ意味を読み取り、それに基づいた援助のあり方を検討した実践を紹介する。この実践を通し、子どもが遊びを展開している「場」が遊びにとってどのような意味があるのか読み取る実践の必要性を考えてみたい。

１、札幌ゆたか幼稚園のこれまでの取り組み

（１）ゆたか幼稚園の概要

①教育理念

②規模と環境

（２）5 年前の見直しの経緯と議論：幼児教育とは何か？

①幼稚園は「やりたい」が叶えられる場所

②自由活動の環境やあり方の見直し

（３）最初の取り組み：遊びのルールの見直し

①幼稚園にあるさまざまな遊びのルールに関する話し合い

・ルールが子どもの遊びの幅を狭めること、子どもの育ちを奪うことになっていないか？

②ルールは教師が伝えるものではなく、子ども達と作るもの

（４）遊び環境を考えるチームの結成

①園内を 3～4 のエリアに分け、各エリアに 3～4 名の教師が所属するチーム作り

②チーム作りに関する試行錯誤

③チーム内での話し合いの時間の確保「10 分研修」

④チーム内での話し合いに役立つ、イメージをより具体的に共有する方法としての「写真」

２、砂場以外の場所で行わる砂遊びに関する実践研究

砂場以外の場所で行われる砂遊びを取り上げた実践研究を行い、研究の中間まとめと次回への課題の確認のために、3 回の園内研修を行った。園内研修では、遊び場面を撮影した写真を持ちより、経験年数が異なる 3～4 名でのグループワークを行い、最後に全体での分かち合いの場をもった。

（１）園内研修１「写真から遊びの意味を読み取る」（4 月 13 日）
グループワーク：各自が持参した砂場以外で行われている砂遊びの写真をもとに、「なぜその場でその遊びが展開されていたのか」を考える

＜グループワークの効果＞
・砂の種類、場が与えるイメージ、人からの影響などから、子ども達が色々な場を選んで砂遊びを展開していることを共通理解した
・何気ない遊びと思われるものの中に意味を見出すことの意義への気づきがあった
・子どもの内面を読み取る経験が、子どもの観方を新たにするきっかけや、教師の視点の変化につながった

（２）園内研修２「遊びの過程に育ちや学びを見とる」（5 月 22 日）
グループワーク：砂場以外で行われている砂遊びの過程を写真に収め、その遊びにおける子ども集団の「育ち」や「学び」が何であるかを話し合う

①グループワークで導かれた子どもの「育ち」「学び」
・作り出す力：イメージからの創造、経験を活かした新しい遊びの創造、試行錯誤する
・人と交わる力：イメージを共有する、伝え合う、高めあう、相談する、役割分担する
・生活に必要な知識・技術：道具の使い分け、見極める力、力加減、選択する力
・物事への意欲：挑戦する、好奇心をもつ、継続して取り組む

②年齢による遊びの深さの違いへの気づき
・年少児の育ちや学びにつなげるための教師のかかわりや環境構成の必要性

③子どもの「育ち」や「学び」を広げていくために
・3 エリアの環境構成の再検討

④ゆたか幼稚園の「園文化」と子どもの育ちや学びとの関連
・子ども達の自由が保障された園文化から生まれる遊びの広がりと子どもの育ちや学び

（３）園内研修３：「遊びを支える物的環境やかかわりを考えた実践」（6 月 19 日）
グループワーク：前回の園内研修を受けて、子どもの「育ち」や「学び」を広げるためのかわりや環境構成を考え、実施した結果、遊びがどのようになっていったのか、その様子がわかる場面を写真に収め、内容を話し合う

＜グループワークでの気づき＞
・活動や子どもの年齢によって教師がモデルとなる必要性
・単発的な遊びを広げるための援助の必要性
・物的環境のさらなる充実
・ひとりひとりがステップアップしていくその瞬間を見逃さないかかわりの必要性
・遊びにどのくらい満足しているのか？遊びに対する子どもの気持ちを読み取る必要性

３、砂場以外の場所で展開される砂遊びに着目する実践の意義

（１）子ども（子ども集団）にとっての意義

①自己のイメージを自由にすぐ表現できる

・滑り台の下：お家（滑り台の下という環境）　お家で誕生会、バーベキュー（砂と道具で）

・園庭に掘られた穴：バーベキューコンロ、お鍋、お風呂

・子どもが何等かのイメージを持った際に、その場ですぐに、いろいろなものに変化する「そこにある砂」でイメージを表現する遊びが展開できる

②砂や土の質感に気付く（科学的視点の基礎の獲得）

・泥団子つくり、さら砂つくり、チョコレートつくりなど、粒子が細かい砂や土、水分の多い砂や土など、作るものにあった砂や土を選びながら、その特性を感じている

③「何気ない遊び」に意味が見出される

・教師が園庭のさまざまな場所で行われている「何気ない遊び」に着目する視点を得る

・「何気ない遊び」に価値が見出され、遊びへのかかわりや環境構成を考えるきっかけとなる

・結果的に子どもの育ちや学びにつながる豊かな遊びが展開される。

（２）教師（教師集団）にとっての意義

①子どもを深く見る視点を得る

・砂場以外で行われている砂遊びは、それぞれが砂を色々な形で利用しながら遊んでいる

・どのようなイメージで何をどう見立てて遊んでいるのか？何を面白がっているのか？を深く観察しなければならない

・そういった積み重ねが教師の子どもを観る目の質を向上させる

②遊びの前後をとらえて、次の予測を立てて遊びについて語る素地ができる

・園内研修において遊びで子どもの何が育っているのか？を問うことを続ける

・その結果、子どもの遊びを「その場」だけのとらえにとどまらず、連続した一連の流れのなかの一場面としてとらえ、次の予測をたてて語る姿がみられた

②子ども観・保育観の共有

・園内研修では、経験年数の異なるグループワークでの「遊びのとらえ」の話し合いを行う

・「遊びのとらえ」に関する話し合いは、自分の保育の仕方」よりも話がしやすい

・さまざまな考えに触れ、ゆたか幼稚園の子ども観・保育観の共有が図られていく

（３）一連の実践研究を通して

①子どもの遊びの「場」の意味をとらえることの必要性

②写真という媒体を使用し、自園の保育を第三者的視点で確認することの有効性

③話し合いの土壌があること、園に馴染んだ方法で実践研究をしていくことの必要性